

行雲舎の本棚から その5

残暑お見舞い申し上げます。図書室のある古民家ゲストハウス・行雲舎です。約2000冊の蔵書の中から、気になる本やお勧めの本を紹介します。

8月15日は81回目の終戦記念日です。広島や長崎の「原爆の日」を経て終戦記念を迎える8月は、平和の尊さをしみじみと感じさせられます。一方で、国際社会ではロシアによるウクライナ侵攻、米国とイスラエルによるイラン攻撃などの戦争が絶えず、国内でも武器輸出の規制緩和、防衛費の増強といった政策が取られ、平和を揺るがしかねない危うさを感じます。

そこで、今回は「ひとはなぜ戦争をするのか」という根源的な問いを、物理学の世界的権威アインシュタインと精神分析の創始者フロイトが交わした書簡をまとめた一冊を取り上げます。

『ひとはなぜ戦争をするのか』A・アインシュタイン/

S・フロイト著

「人間を戦争というくびきから解き放つことはできるのか」。天才物理学者のアインシュタインは、国際連盟からの「いまの文明でもっとも大切と思える問いについて、誰でも好きな相手を選んで意見交換してほしい」という依頼を受け、こう問いかけました。相手は精神分析の権威フロイト。往復書簡の形で、二人の知の巨人が戦争について法制度や人間の本質を考察しています。世界が第2次世界大戦に向かっていく1932年に出版され、アインシュタインもフロイトもドイツのナチス政権に迫害されたユダヤ人で、米国や英国に亡命したという共通点があります。

本書の内容（要約）

アインシュタインは、まず、フロイトへの手紙で、各国が協調する国際的な枠組みでしか平和を実現する方法がなく、数世紀ものあいだ実現しないのは人間の心自体に問題があるのではないかと疑問を投げかけます。そして、多くの人が破壊への衝動にたやすく身をゆだねてしまうことが、戦争の根底に潜む問題ではないかと疑問を投げかけます。

これに対し、フロイトは、人と人の間の利害の対立は基本的に暴力で解決されるものだとした上で、社会の発展に伴い、弱いものが団結することによって暴力の支配から法（権利）の支配に変わっていったと指摘します。しかし、人間には生きようとする力（生の欲

動)と破壊しようとする力(死の欲動)が存在し、人間の攻撃性は戦争に駆り立てる一因であるとし、そして、戦争をなくすには、人間の攻撃性を戦争とは別のはけ口に向かわせる、すなわち愛とか一体感といった感情の絆と、自分の欲動を理性のコントロール下に置くことの二つを挙げます。

さらに、文化の発展が人間の心のあり方を変え、戦争への拒絶反応が体と心の奥底から湧き上がってくるはずだと主張します。

本書の最後には、解剖学者の養老孟子さんによる「ヒトと戦争」と、精神科居斎藤環さんによる「私たちの『文化』が戦争を抑止する」という2編の長い解説が付されています。この解説を読むことで、より本編への理解が深まります。

印象に残った一節

文化の発展が生み出した心のあり方と、将来の戦争がもたらすとてつもない惨禍への不安—この二つのものが近い将来、戦争をなくす方向に人間を動かしていくと期待できるのではないのでしょうか。これは夢想的な希望ではないと思います。どのような道を経て、あるいはどのような回り道を経て、戦争が消えていくのか。それを推測することはできません。しかし、いまの私たちにもこういうことは許されていると思うのです。

文化の発展を促せば、戦争の終焉へ向けて歩み出すことができる！

読後の感想

書店が好きで、よくふらっと訪れますが、数年前に偶然、書店で出会った本です。何度か読み返し、そのたびに、1世紀近くたった今も戦争が絶えない現実に暗澹たる思いにとらわれる一方、偉大な先人の言葉に一筋の光明を見いだしています。

フロイトが指摘したように、人間には攻撃性や破壊への欲動があり、それを完全になくすことはできないのですが、その攻撃性を、他者との絆や一体感や団結を強めることで、回避することできるのではないのでしょうか。まず身近なところから、価値観や考え方が違う相手とも「対話をあきらめない」という選択を積み重ねていくことが大切でしょう。

国家間も互いの利害や立場を、対立ではなく対話によって解決する道を探ってもらいたいものです。そのためには、フロイトは「優れた指導層をつくるための努力をこれまで以上に重ねていかねばならない」と指摘していますが、世界の現状をみれば悲観的にならざる

をえません。しかし、「文化が発展すれば戦争の終焉に歩み出せる」というフロイトの言葉を糧に、平和をあきらめることなく、理想を追い続けたいと思われました。

